The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人工妊娠中絶という周産期喪失の心理臨床学的研究
Author(s)	管生, 聖子
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34005
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕人工妊娠中絶という周産期喪失の心理臨床学的研究

学位申請者　　管生聖子

本論文は，人工妊娠中絶という周産期の喪失体験をした女性の内的世界を明らかにし，当事者の人間理解を適確にし，よりよい心理的ケアに結び付けるための研究である。周産期の死に関する研究は，近年徐々になされており，流産・死産・新生児死経験者の心理的諸問題を明らかにすることや，またそれらに対するアプローチに関心がよせられ実践や研究が進められつつある。しかしながら，人工妊娠中絶（人工流産・人工死産）に焦点をあてた臨床心理学的な問題に関する研究はほとんどされてこなかった。

その理由は第一に人工妊娠中絶は自分で選んだこと，個人的な体験であると見なされていること，第二にタブー視される傾向にあることが挙げられる。そのため，その心理的諸問題に関心を持つ研究者が少なく，また研究やケアにあたることが出来る場がなかった。本論文では，先行研究を参考に PTSDとの関係について調査し，インタビュー調査によって人工妊娠中絶を経験した女性の内的世界を明らかにした。それらから，心理的側面を把握し，人工妊娠中絶に見られる顕著な罪悪感や後ろめたさなどの特殊性を考慮した心理的サポートを検討してゆくことが出来た。

本論文は，10の章から構成されている。

第１章　妊娠するということ

第１章においては，周産期喪失が歴史的にどのように捉えられてきたのかを概観するため，人類にとって普遍的な出来事である妊娠出産が，妊婦や家族，社会にどのように受け止められてきたのか，どのような心理的意味を持っていたのかということに注目した。妊娠出産は，大きな心理的課題を含んでおり，身体的変化だけでなく心理的変化も起こる時期である。多くの文化において通過儀礼の時とされ，その心理的危機を乗り越えるための智恵が古来より存在していた。現代においては，医療プログラムに沿って妊娠出産期を過ごすが，そのような心理的危機が含まれる時期であるため心理的サポート体制を充実させる必要性があることについて論じた。

第２章　出産をめぐる穢れと神聖さ

第２章では出産の場がどのように変化してきたか，妊娠出産にまつわる穢れ意識がある一方で，神聖視されてきた歴史があることに触れた。周産期という危機的な状況にある母子を守るための機能が歴史的にも存在していたと考えられる。

第３章　出産と歴史

古代から現代における妊娠や出産，周産期喪失に関連する事柄をまとめた。周産期に亡くした子がどのように受け止められ，扱われてきたか，それらにはどのような心理的意味が含まれているのかについて論じた。

第４章　妊娠期・周産期の喪失

周産期喪失に関しての定義を明確化し，人工妊娠中絶の現状について論じた。周産期は本来妊娠 22 週から生後 7 日未満とされているが，妊娠に気づいたその時から母子の関係は始まると考え，臨床心理学的視点から妊娠初期からを周産期として扱うこととした。日本の人工妊娠中絶件数は減少傾向にあるものの，2009 年度でも 20 万件を超えている。人工妊娠中絶という選択は，当事者にとって後々にわたっても心理的影響が大きく，ネガティブな精神状態をもたらす可能性があるが，心理的ケアに関する具体的方針がなく，当事者はもちろん関わる医療スタッフも困惑しているという現状がある。

第５章　トラウマと悲嘆

先行研究において指摘されるトラウマや悲嘆という視点を用い，人工妊娠中絶を含む周産期喪失について論じた。

第６章，７章，８章は本論文の根幹を成す調査研究である。

第６章　妊娠初期に人工妊娠中絶をした女性の内的世界

妊娠初期に個人的な理由によって人工妊娠中絶をした５名の女性を対象とした調査研究である。トラウマの可能性を探るため自記式質問紙 IES-Rを用い，またインタビュー調査による質的研究を行った。５名中４名に PTSDの可能性を示す結果が得られたが，インタビューによる語りからは，わが子への愛着，摂食の問題，自殺企図や自殺未遂など PTSDだけでは捉えきれない臨床的に重要と思われる症状も抽出された。

第７章　妊娠中期に人工妊娠中絶をした女性の内的世界

妊娠中期に医学的な理由によって人工妊娠中絶（人工死産）をした 15 名の女性へのインタビューおよび質問紙調査についての結果，分析，考察である。PTSDの可能性については 15 名中８名にその可能性が示され，１名は ASDの可能性が考えられた。グラウンデッドセオリーアプローチによる分析で，１つのカテゴリーと９つのサブカテゴリーが得られた。心理的揺れと収まりを繰り返しながら「人工死産の受け止め」がなされ，自己の回復へと向かうプロセスが明らかとなった。また，語られた内容の質が損なわれないよう事例として３例提示している。

第８章　人工死産経験者同士の時間と空間の共有

人工死産をした人々の心理的サポートの一つとして当事者同士の関わりが求められていることから，自助グループによる交流会を４回実施した。当事者間の交流は，人工死産経験者の孤立感を軽減し，普段は語ることが出来ないわが子への思いを表現する場となった。また，適切な形で医療スタッフとも交流することは，交流会後も当事者の心の支えとなり得ると考えられた。交流会の運営に当たっては，参加者を想い迎えることが重要であり，課題を検討しながら継続的に実施してゆくことが求められていると考えられた。

第９章　いのちの意味

人工妊娠中絶によってわが子を亡くした当事者に心理臨床家がどのように関わってゆくことが可能であるか論じ，まとめた。亡き子へ愛着を抱くことに対する罪悪感や，愛着を表現することへの葛藤を受容し，当事者が亡き子に向き合ってゆくことに添い，愛着を表現できる場をつくることが必要である。

第 10 章　調査研究のまとめと課題

第６・７・８章における調査研究のまとめを行い，本研究の限界と課題についても触れた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　管生聖子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	老松克博
	副 査　教授	井村　修
	副 査　准教授	村上靖彦

論文審査の結果の要旨

本論文は，人工妊娠中絶（人工流産・人工死産）を周産期の女性の喪失体験として捉え，トラウマ研究および悲嘆研究の観点を足掛かりに，その内的世界の様相および回復のプロセスを詳細な調査によって明らかにするとともに，当事者の交流会を立ち上げる新しい実践を通して，望ましい心理的ケアのあり方を探求した労作である。

本論文は１０章から構成されている。第１～３章では，妊娠出産が歴史的にどのように扱われてきたのかを概観し，当事者と周囲に及ぶ臨床心理学的影響についてまとめたうえで，現代の妊産婦を取り巻く状況に深刻な問題が含まれていること，とりわけ諸般の事情から当事者が沈黙を余儀なくされがちな周産期喪失に対する心理的サポート体制を充実させる必要があることを指摘している。

第４～５章では，「周産期」という用語について，当事者のたどる心理的プロセスを重視する臨床心理学的立場から定義し直し，それにもとづいて，周産期喪失に関するこれまでの知見をPTSDおよび悲嘆の概念と照らし合わせて整理，再構成する試みを行なっている。

第６～８章は調査研究を中心とした部分で，本論文の根幹を成す。主要な研究は３つである。第６章の研究１では，妊娠初期に個人的理由によって人工妊娠中絶をした女性たちを対象に質問紙調査をし，PTSDの可能性を示す結果を高い割合で得ている。インタビュー調査も実施して内容分析を行ない，摂食の問題など，単にPTSDの枠内では捉えきれない多様な諸症状も存在すること，そして当事者が（子どもは産めなかったが）新たな自分自身を産み出していくかのような内的経験が生じうることを明らかにした。

第７章の研究２では，妊娠中期に医学的理由によって人工妊娠中絶（人工死産）をした女性たちを対象に質問紙調査をし，やはり高頻度にPTSDである可能性を示す結果を得ている。また，ここで実施されたインタビュー調査では，グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から，心理的な揺れとおさまりを繰り返しながら自己の回復へと向かうプロセス・モデルが生成された。提示されている３つの事例は，記述が厚く緻密で，この領域のデータとしてまことに貴重なものである。

第８章の研究３では，人工死産経験者から当事者同士の直接的交流を望む声が聞かれたことに応えて，他に類を見ない交流会を立ち上げて継続的に実施した経験をまとめている。結果として，当事者間の交流は，人工死産経験者の孤立感を軽減させ，ふだんは語れない亡き子への思いを表現し共有できる場となることが明らかとなった。くわえて，医療関係者の参加が当事者に及ぼす影響については否定的な面もあるものの，適切な交流であればその後の当事者の心の支えとなりうることも見出された。

最後の第９～１０章では，全体をまとめるかたちで，人工妊娠中絶の当事者に対する心理臨床家のあるべき関わり方を論じている。すなわち，亡き子への愛着を抱くことやそれを表現することに対する罪悪感と葛藤を理解し，当事者が自身に向き合っていくための場と機会を提供することの重要性である。

周産期の死に関する研究としては，近年，流産・死産・新生児死に関心が寄せられているが，人工妊娠中絶に焦点をあてた臨床心理学的問題に関する研究はほとんどなかった。本論文は，当事者自身の著しい後ろめたさゆえに研究の進みにくいこの領域で，得難いデータを収集して，その心理的諸側面の理解に新たな見地を開き，さらには実践も経て，愛着表出へのためらいといった特殊性をふまえた心理的サポートを提案する，非常にオリジナリティの高いものである。以上より、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断された。